
Bantik 語の Pluractional Verb

—意味分析と用例—

内海 敦子*

概 要

本論文はインドネシア北スラウェシ州で話されている Bantik 語に見られる Pluractional Verb の記述と分析を試みたものである。Bantik 語はオーストロネシア語族、西マラヨ・ポリネシア諸語、フィリピン諸語の一つで、インドネシアの北スラウェシ州で話されている。Pluractional Verb とは、オーストロネシア諸語やチャド語派にみられる複数性に関する意味を表す動詞である。例えば動詞の iterative aspect や動詞の主語や目的語の複数性などのうち、いくつかを併せ持った意味を表す。本論では、Bantik 語における Pluractional Verb の形態的特徴と意味的特徴に焦点を当てて記述する。

Newman 1980 がチャド語派において 'Pluractional verb' と呼んでいる、「動作主体（主語）の複数性」「動作の回数の複数性」「動作の対象の複数性」などの概念を表す動詞と近似の partial reduplication を含む動詞が、Bantik 語にも存在する。チャド語派の pluractional verb も reduplication を含むことが多く、形態論的にも類似している。以下ではまず、Bantik 語の reduplication について簡単に紹介したあと、その中の pluractional verb について詳しく述べる。

1. Bantik 語の概略

Bantik 語はオーストロネシア諸語の一つで、West-Malayo Polynesian 諸語、Philippine 諸語に属し、さらに周辺の五つの言語を含む Sangiric subgroup の一つとされる (cf. Noorduyn 1991, Sneddon 1984 他)。フィリピン諸語の特徴である形態論の豊かさを持ち、reduplication も生産的に様々な派生に用いられている。インドネシア国、北スラウェシ州マナド市近郊で話されており、話者は 1990 年代はじめに一万人と推定されていたが (Noorduyn 1991)、この話者数は第一言語話者のみのものなのか、あるいは第二言語話者を含んだものなのかは明らかにされていない。内海 2008 などの観察によると、全ての Bantik 語話者はインドネシア語マナド方言とのバイリンガル話者であり、Bantik 語を第一言語とする話者は減少の一途をたどっている。総じて 1960 年代以降に生まれた話者にはマナド方言を第一言語とし、Bantik 語を第二言語とする話者が多く、1980 年代以降に生まれた世代は非常に限られた Bantik 語しか解さない。1950 年代までに生まれた Bantik 族の人々の多くは第一

言語として Bantik 語を話していた時期を持つが、現在では同世代以上の Bantik 族に対してしか Bantik 語を用いることがなく、マナド方言が混じる話し方をしている（内海 2010, Utsumi 2012a）。以上のように、Bantik 語は消滅の危機にある言語の一つと言える。Bantik 語の文法記述には内海 2005 の他、Bawole 1993 がある。

Bantik 語には五つの母音 /i, e, a, o, u/ と十四の子音 /p, b, t, d, k, g, s, h, ʔ, j, r, m, n, ŋ/ を持つ。子音のうち、声門閉鎖音は稀な例外¹⁾を除き、base 末にしか来ない。

形態論の概略を述べると、base だけで形成される語もあるが、多くの語は base に一つ以上の接辞が付加して形成される。名詞と形容詞には base だけで形成される語も存在するが、動詞はほとんどの場合 base に接辞が付いた形でしか現れることができない。そのほか、reduplication も生産的に機能する²⁾。

動詞はフィリピン諸語の典型的な性質を示し、Actor Voice に加え、Undergoer Voice が二つ存在する（cf. Bawole 1993, 内海 2005）。本論文ではこれら二つの Undergoer Voice を Goal Voice と Conveyance Voice と呼ぶ（Utsumi 2012b 他）。それぞれの voice において、非過去形と過去形が存在する。

基本的な語順は SV（ないし Agent-Verb）と SVO（ないし Agent-Verb-Patient）である。動詞が Actor Voice を取るときには、これらの語順が多く用いられるが、Undergoer Voice のときはそうではない。V+Agent+S（ないし Verb-Agent-Patient）の語順を取ることが、テキストによって異なるが、50% 前後ある。自動詞文のときにも VS の語順をとることは特に会話においてはよくみられる。

他動詞の Actor Voice の文においても、新しく導入された名詞句が節の主語として機能するときは、VS（動詞が自動詞のとき）あるいは VOS（Verb-Patient-Agent）の語順になることが、特に会話においては、良く見受けられる。

2. Bantik 語の動詞の形態論

Bantik 語の名詞については base のみで文中で使用されるものと、動詞の base、形容詞の base に派生接辞が付加して形成される名詞がある。形容詞も base のみで使用されるものと接頭辞 *ma-* が付加して使用されるものがある。Bantik 語の動詞は、voice-indicating affix が付加しないと文中に現れることが原則としてできない³⁾。その他、derivational affix が付加することもあるが、その際も voice-indicating affix が付加する必要がある。以下の表 1 で太字で示したものが voice-indicating affix である⁴⁾。

その他、使役を表す接辞 *pa-/paN-*、applicative の接辞 *pa-/paN-*、意図的動作を表す接辞 *tiN-/tiŋka-*、非意図的動作 - を表す接辞 *i-*、装着を表す接辞 *gi-*、動作補助を表す接辞 *kipa-* などがある。

その他、reduplication も生産的に、反復動作、習慣、動作主の複数性などを表す動詞を形成するために用いられる。Bantik 語の reduplication には名詞や形容詞を派生する役割もあるが、ここでは動詞にかかわる reduplication についてのみ取り上げる。次の節で reduplication と、それを含む動詞について述べる。

表 1: 動詞のパラダイムと voice-indicating affix

	Base	Actor Voice	Goal Voice	Conveyance Voice	Meaning
Non-past	<i>tontoŋ</i>	<i>t-um-ontoŋ</i>	<i>tontoŋ-an</i>	*	to watch
Past		<i>t-im-ontoŋ</i>	<i>ni-tontoŋ-an</i> / <i>t-in-ontoŋ-an</i>	*	
Non-past	<i>kiso</i>	<i>ma-kiso</i>	<i>kiso-n</i>	*	to rub
Past		<i>na-kiso</i>	*	<i>ni-kiso</i> / <i>k-in-iso</i>	
Non-past	<i>bihei</i>	<i>ma-mihei</i>	<i>bih-an</i>	<i>bihei</i>	to give
Past		<i>na-mihei</i>	<i>ni-bih-an</i> / <i>b-in-ih-an</i>	<i>ni-bihei</i> / <i>b-in-ihei</i>	

3. Reduplication の種類と動詞の派生

Reduplication には全体を繰り返す full reduplication と、一部を繰り返す partial reduplication がある。Full reduplication は名詞語基にのみ適用される。Partial reduplication には二種類ある。Type A は base の最初の子音が繰り返され、その後母音の /a/ が挿入され、その後に base が置かれる。Type B は最初の音節と第二音節の onset と nucleus が繰り返され、その後に base が置かれる。以下では子音を C、母音を V、音節を σ で表す。また、base の最初の onset の子音は C1、最初の音節は σ_1 として表す。第二音節の onset の子音は C2、第二音節の母音は V2 で表す。

(1) Bantik 語の partial reduplication

Type A: “C1+/a/+base”

Type B: “ σ_1 +(C2)V2+base”

まず reduplication をとる形容詞の例を挙げる。*bagai* ‘big’ が Type A の partial reduplication を起こす場合は *ba-bagai* ‘big (for plural objects)’ となり、Type B の full reduplication を起こす場合は *baga-bagai* (bigger) となる。

Bantik 語の動詞は、base に接辞が付加して形成される。接頭辞の voice-indicating affix の *maN-* が付加した場合、base の最初の子音が同じ調音位置の鼻音に変化するが、その場合、繰り返されるのは接辞の部分ではなくて鼻音化を起こした base の部分のみである。Type A の例としては、base が *puahi* ‘to dry’ の場合を見る。voice-indicating affix の *maN-* が付加し base の最初の子音 /p/ が鼻音化して /m/ になり、*ma-muahi* となるが、これが Type A の reduplication を起こすと *ma-m-a-muahi* ‘to dry habitually’ となる。Type B の場合、*ma-mua-muahi* となる。base が母音で始まる場合は、母音の /a/ が添加されるのみである。例えば *oyou* に voice-indicating affix が付加した *m-oyou* が Type A の reduplication を起こすと *ma-a-oyou* となる。

次頁の表 2 には reduplication の概要を表した。表中の NA は Non-applicable の略である。

表2: Reduplication forms and their functions

	Noun Bases	Pronoun	Adjective Bases	Verb Bases
Full reduplication	Plurality	NA	NA	NA
Partial red. Type A “C1+/a/+Base”	NA	NA	Plural THEME ⁵⁾	Plural ACTOR Derivation of adjectives Derivation of nouns (instrument, manner of action, location)
Partial red. Type B “σ1C2V2+Base”	NA	Soleness	Comparative degree Excessive degree	Iterative aspect

4. Pluractional verbs

本節では、Pluractional verb という用語について説明する。Newman 1980 では、アフロ・アジア語族、チャド語派について用いられたこの用語は、以下の (2) ような意味・機能を持つ動詞を指し示す (Gimba 2000: Chapter 10 から引用、Bole 語について)。

- (2) Functions of Pluractional Verbs (Gimba 2000)
- a. One subject repeatedly doing the same action.
 - b. One subject repeatedly doing the same action to the same object.
 - c. One subject acting iteratively on several objects.
 - d. Several subjects acting one by one.
 - e. Several subjects acting iteratively on the same object.
 - f. Several subjects acting iteratively on several objects.

Pluractionality とは、以上の機能を包括的に意味しうる用語である。チャド語派における pluractional verb は単なる「主語の複数性」、あるいは「反復相」という記述では包括しきれない広がりを見せている。そして多くの場合、reduplication を用いて形成される。

本発表で pluractional verb という術語を用いたのは Bantik 語においても、チャド語派にみられるような reduplication を用いて形成される同一の動詞が「主語の複数性」と「反復する動作」の両方を意味することがあるからである。

Bantik 語は、チャド語派とは異なり、動詞が目的語と一致する現象がなく、object の複数性が動詞の形態に影響を及ぼさない。Bantik 語には上記 (2) a, b, d, e が特に関連する。これらはさらに (I) 'repeated action/iterative action' 「動作の複数回性」、(II) 'plurality of subject' 「主語の複数性」の二つの用法に集約できる。

Bantik 語の Type A と Type B の reduplication のうち、Type A は (I) と (II) の両方の用法がある。Type B は (II) の用法しか持たない。本発表では Type A の動詞を plurac-

tional verb と呼び、次節で詳しく述べる。

なお、Bantik 語における pluractional verbs について上記 (2) の定義を参考にその機能を記すと、以下の (3) のようになる。

- (3) Pluractional Verbs in Bantik
- a. One subject repeatedly doing the same action: habitual aspect, iterative aspect.
 - b. One subject repeatedly doing the same action as occupational action.
 - c. Several subject repeatedly doing the same action: habitual aspect, iterative aspect.
 - d. Several subject repeatedly doing the same occupational action.
 - e. Several subject acting one by one.
 - f. Several subject acting the same action together.

Pluractional verb が用いられたとき、主語が単数のときは、(3)a と b に示されているように習慣的な、または職業上の動作を表すと解釈される。主語が複数のときも習慣的な、または職業上の動作を表されると解釈することができる ((3)c, d に記した) が、それ以外に e のように一人一人が同じ動作を行っている (*h-um-a-hompoy* 「めいめい座る」、下記の (10)b 参照)、あるいは f のように同じ動作を複数で行う (*ma-a-oyou* 「何人かで泳ぐ」、下記の (4)a 参照) ことを表す。

次節では Bantik 語の pluractional verb について例文を挙げて記述する。

5. Bantik 語の Pluractional verbs: Reduplication Type A

本節では Type A の reduplication を起こした動詞を用いた文例を挙げる。データは基本的に 1999 年から 2003 年にかけて、北スラウェシ州のマナド市近郊の Buha 村にて採集された elicitation の文例である。コンサルタントは 1940 年代生まれの男性二人である。

Type A の partial reduplication を起こす動詞は (I) 「動作の複数回性」と (II) 「主語の複数性」を表す。(I) に関しては、iterative aspect というより、習慣性の高い動作を表すので前節 (3) では habitual or occupational action を示すと記した。多くの場合は職業的な動作を表すが、高い頻度で行われる習慣的な動作を表すこともある。

以下の例文 (4) で用いられている *ma-a-oyou* 'swim. PLAC は必ず「主語の複数性」を表す。「複数の主語」の「一回性の動作」あるいは「複数の主語」「複数回の動作」を表す。(4)a の文は主語が複数なので適格と判断されるが、b の文は受容されにくい。これに対し、(5) の文で用いられている動詞 *ma-b-a-baru?* は主語が (5)a のように複数であっても (5)b のように単数であっても成立する。(5)a においては「主語の複数性」という解釈と、「動作の複数回性」、より詳しく言えば「職業に関する習慣的な動作」を表すという解釈と、二つの可能性がある。それに対して (5)b のように主語が単数であれば「動作の複数回性」としての解釈しかない。通常の解釈であれば訳に示したように「職業」を表すものと理解される。

従って、(4)b と (5)b の適格性の違いは動詞の意味と、Bantik 語話者の常識によるもの

である。例えば、水泳が生業として成り立つ言語外の条件を与えれば、(4)bの文は適格性を増す。

- (4)a. *side ma-a-oyou daŋ se?e*
 I.3pl AV.NPST-PLAC-swim DIR.upward there
 'They are swimming over there./They usually swim over there'
- b. *??isie ma-a-oyou daŋ se?e*
 I.3sg AV.NPST-PLAC-swim DIR.upward there
 'S/he usually swim up there'
- (5)a. *i-deki bo i-tuadi?=ne ma-b-a-baru?*
 I-Deki and I-younger.sibling=NI.3sg AV.NPST-PLAC-sell
 Deki and his younger brother/sister will sell something/Deki and his younger brother/sister are vendors'
- b. *i-deki ma-b-a-baru?*
 I-Deki AV.NPST-PLAC-/a/-sell
 'Deki is a vendor'

以下の例(6)から(8)もType Aのreduplicationを含む動詞が用いられているが、主語が単数であるため、「動作の複数回性(職業にともなう習慣的な動作)」を表すと解される。例(8)で用いられている*ma-n-a-nekoso?*は、主語が職業としての「泥棒」であること、あるいは「盗癖のある人」であることを表す。

- (6) *i-heis ma-ŋ-a-opasa?*
 I-Heis AV.NPST-PLAC-/a/-fish
 'Heis is a fisherman (Lit. Heis constantly fishes)'
- (7) *i-stefi ma-m-a-marō*
 I-Stevy AV.NPST-PLAC-/a/-announce
 'Stevy is an announcer'
- (8) *isie ma-n-a-nekoso?*
 I.3sg MAN-RED-steal
 'S/He is a thief'

以上挙げた例(4)から(8)のように、Pluractional Verbが非過去形であり、自動詞的な意味を持つ(*ma-a-oyou* 'swim')か、目的語が明示されていない場合、「主語の複数性」か「職業的な動作」を表すことになる。ただし、以下の(9)のように特定性の高い目的語が明示されている場合は解釈が少々異なる。(8)と同じPluractional Verbが用いられているが(9)では職業的な「泥棒」あるいは「盗癖のある人」という解釈はなされず、「主語の複数性」か「習慣的な動作」のどちらかの解釈しか生まれない。これは、Pluractional Verbで示される動作が特定性を帯び、様々な場所や時で起こるという解釈が不可能になるため

ある。

- (9) *i-pasko bo i-stenli ma-n-a-nekoso? manu? =ku*
 I-Vasco and I-Stenly AV.NPST-PLAC-/a/-steal chicken=NI.1sg
 'Vasco and Stenly will steal my chicken. /Vasco and Stenly repeatedly steal my chickens'

また、動詞の意味が「座る」(例 10)、「起きる」(例 11) のように職業としての習慣的動作とは考えられない場合は、(10)a、(11)a の文のように単数の主語は許容されず、(10)b、(11)b のように複数の主語を明示しなければならない。これらは、複数の主語が銘々動作を行うという解釈を持ち、上記の (3)e の意味を表す。

- (10)a. **isie h<um>-a-hompon*
 I-sg <AV.NPST>-PLAC-/a/-sit
 b. *side h<um>a-hompon*
 I.3pl <AV.NPST>-PLAC-a/-sit
 'They are sitting'
- (11)a. **i-pasko ma-b-a-bayon*
 I-Vasco AV.NPST-PLAC-/a/-wake.up
 b. *i-pasko bo i-stenli ma-b-a-bayon*
 I-Vasco and I-Stenly AV.NPST-PLAC-/a/-wake.up
 'Vasco and Stenly will wake up'

Bantik 語の動詞は、atelic な動作を表す場合は過去における出来事であっても非過去形を用いる。習慣的な動作は atelic の代表例で、たとえそれが過去のもので、現在ではもう習慣としていない動作であっても、非過去形を用いる。従って、職業を表す場合、現在はもう行っていない動作であっても下の例文 (12)、(13) のように非過去形を用いる。それは、複数の主語をとる場合も (例 12)、単数の主語をとる場合 (例 13, 14) も同様である。

- (12) *i-deki bo i-tuadi? =ne ma-b-a-baru? tou*
 I-Deki and I-younger.sibling=NI.3sg AV.NPST-PLAC-/a/-sell but
side ma-n-a-naykoi ie
 I.3p AV.NPST-PLAC-/a/-cultivate now
 'Deki and his younger brother/sister were vendors, but now they are farmers'
- (13) *tete? ni-heis ma-ŋ-a-opasa? tou*
 grand.father LK-Heis AV.NPST-PLAC-/a/-fish but
isie na-iray =te
 I.3sg AV.NPST-die=COMP
 'Heis's grand father was a fisherman, but he is dead'

- (14) *i-stefi ma-m-a-marō pona*
 I-Stevy AV.NPST-PLAC-/a/-announce before
 'Stevy is an announcer (who announces towards villagers from a high place) before'

上記の (12), (13), (14) の例文中には、目的語が明示されていない。「職業」を表す動作を示す場合は目的語を取らない。また、目的語がなくても何が動作の対象なのか理解される。例えば、下の (15)a は「登る」という動作のみしか明示されていないが、「職業としてココナツ木に登る人」であることが理解される。職業的な行為として木に登る場合、Bantik 語地域においてはココナツの実を取るためにココナツの木に登ることしか考えられないからである。(15)b の文のように「ココナツの木」という対象が明示された場合、職業を表している文とは考えにくいため、容認度が下がる。(15)c のように主語が複数であれば「職業」でなく「主語の複数性」を表すものと受け取られるため、適格な文となる。

- (15)a. *i-piteres ma-ŋ-a-ŋabi?*
 I-Peter AV.NPST-PLAC-/a/-climb
 'Peter is a (coconut tree) climber'
- b. *??i-piteres ma-ŋ-a-ŋabi? su kayu m-bayo*
 I-Peter AV.NPST-PLAC-/a/-climb LOC tree LK-coconut
 'Peter is a coconut tree climber'
- c. *i-piteres bo i-pasko ma-ŋ-a-ŋabi? su kayu*
 I-Peter and I-Vasco AV.NPST-PLAC-/a/-climb LOC tree
m-bayo
 LK-coconut
 'Peter and Vasco climb a coconut tree/trees'

また、Pluractional Verb が過去形の場合は「習慣的な動作」(特に職業にかかわるもの)を表すと解釈されない。従って、「主語の複数性」を表すと解釈されるので、主語が単数の場合(例 16,17)は容認されない。

- (16) **i-heis na-ŋ-a-opasa?*
 I-Heis AV.PST-PLAC-/a/-fish
 Intended meaning: 'Heis was a fisherman'
- (17) **isie na-n-a-nekoso?*
 I-3sg AV.PST-PLAC-/a/-steal
 Intended meaning: 'S/He was a thief'

上記の (16)、(17) が容認されないのに対して、「主語の複数性」が明示されている場合は例 (18) から (20) のように pluractional verb の過去形も容認される。

- (18) *side na-a-oyou daŋ seʔe*
I.3pl AV.PST-PLAC-/a/-swim DIR.upward there
'They were swimming over there./ *They usually swam over there'
- (19) *i-pasko bo i-stenli na-n-a-nekosoʔ manuʔ=ku*
I-Vasco and I-Stenly AV.PST-PLAC-/a/-steal chicken=LK.1sg
'Vasco and Stenly stole my chicken. / *Vasco and Stenly repeatedly stole my chicken'
- (20) *i-deki bo i-tuadiʔ=ne na-b-a-baruʔ*
I-Deki and I-younger.sibling=LK.3sg AV.PST-PLAC-/a/-sell
'Deki and his younger brother/sister sold something. / *Deki and his younger brother/sister were vendors'

また、Type A の reduplication を起こす pluractional verb は今までのところ、Actor Voice の動詞でしか容認される例を見つけていない。これは iterative aspect あるいは「反復する動作」を示す Type B の reduplication を起こした動詞と異なる。Type B の動詞は undergoer voice の形もよく使用されている。

以下の表 3 に、pluractional verb の時制、態を考慮した機能をまとめた。

表 3 : Bantik 語の Pluractional verb の機能

	Reduplication Type	Non-past	Past	Object	Voice and Aspect
Iterative action (3)a, c	Type A	○	NA	optional	Actor Voice only, atelic
	Type B	○	○	optional	All Voices, atelic/telic
Occupational action, habitual action (3)b, d	Type A	○	NA	not allowed	Actor Voice only, atelic
Plurality of the subject (3)e, f	Type A	○	○	optional	Actor Voice only, atelic/telic

6. Type B の reduplication を起こす動詞

この節では、Type B の reduplication を起こした動詞について簡単に記す。Type B の動詞は「動作の複数回性」を示すが、「主語の複数性」を表すわけではない。従って、主語が単数か複数かは容認性に影響を及ぼさない。逆に、主語が単数であっても複数であっても「動作を複数回行う」ことを表す。例文 (21)、(22) に示されているように主語が複数でも単数でも、非過去形も過去形も両方適格とされる。これらの非過去形（接頭辞 *maN-* が付加した形）は現在の状態も過去の習慣的な動作も表すことができる。過去形は特定性の高い行為が過去において限定された回数行われたことを表す。(21) も (22) も、行為が行われる場所が特定されているので、過去形の使用が可能となる。非過去形も過去形も「反復する動作」を表すが、非過去形の方がより幅広い用法を持つと言える。

- (21)a. *i-deki ma-baru-baru?/ na-baru-baru? su sie*
 I-Deki AV.NPST-PLAC-sell/ AV.PST-PLAC-sell LOC here
 'Deki often sells/sold something here'
- b. *i-deki bo i-tuadi?=ne ma-baru-baru?/*
 I-Deki and I-younger.sibling=LK.3sg AV.NPST-PLAC-sell/
na-baru-baru? su sie
 AV.PST-PLAC-sell LOC here
 'Deki and his younger brother/sister often sell/sold something here'
- (22)a. *tete? ni-heis ma-ηopa-ηopasa?/na-ηopa-ηopasa?*
 grand.father LK-Heis AV.NPST-RED-fish/AV.PST-RED-fish
su ake.bagai ie
 LOC river this
 'Heis's grand father often fishes/fished at this river'
- b. *side ma-ηopa-ηopasa?/na-ηopa-ηopasa? su ake.bagai ie*
 I3pl AV.NPST-RED-fish/AV.PST-RED-fish LOC river this
 'They often fish/fished at this river'

同様に、(23)、(24)に見られるように、職業として成り立つとは考えられていない動作であっても、単数の主語を取りうる。

- (23) *i-terok h<um> ompo-hompon*
 I-Terok <AV.NPST>-RED-sit
 'Terok usually (just) sit (and does not work)'
- (24) *isie ma-oyo-oyou day se?e*
 I3sg AV.NPST-RED-swim DIR.upward there
 'S/He usually swim over there'

上記の (21)a, b, (22)a, b の説明で述べたように、Type B の Pluractional Verb は特定性が高い動作であれば過去形をとることも可能だが、反復される回数が限定されず、いつ始まっていつ終わったかが不明確な習慣的な動作は atelic とみなされ、(25)、(26) のように過去の出来事であっても非過去形を用いなければならない。(25) は「喫煙」という習慣を表すものなので、どんな場合でも非過去形を用いる。(26) は動作の行われる場所が特定されているものの、「幼少期」という始まりと終わりがはっきりしない期間の習慣を表すため、過去形の使用は容認性が低い。「習慣性」の高い行為で、始まりと終わりがはっきりしない場合は通常非過去形を用いることになる。

- (25) *side ma-noso-noso? tou ie aya=te*
 I3pl AV.NPST-RED-smoke but this not=COMP
 'They used to smoke but not any more'

- (26) *i-santi ma-oyo-oyou su ake.bagai ie ada*
 I-Santy AV.NPST-RED-swim LOC river this when
kokonio²=ken
 small=CONT
 'Santy used to swim at this river when he was small'

Type B の過去形が用いられるのは telic な解釈が可能な場合である。(27) は動作の対象が限定されており、(28) は回数が限定されているので、過去形が用いられているのである。(29) は反復動作の期間が限定されているため、telic と解釈され、過去形が用いられている。

- (27) *ia² na-hija-hija ure² pona tou ie aya=te*
 I.1sg AV.PST-RED-cook snake before but now NEG=COMP
 'I used to cook snakes, but not any more'
- (28) *i-terok na-ŋabi-ŋabi² bayo ene ka-dua kabaini*
 I-Terok AV.PST-RED-climb coconut that KA-two just.now
 'Terok climbed up that coconut tree twice just now'
- (29) *i-yopi nam-bere-mbere su bituŋ su huaŋ nu*
 I-Yopi AV.PST-RED-work LOC Bitung LOC inside LK
rima taon
 five year
 'Yopi worked in Bitung (place name) for five years'

また、(30)、(31) のように undergoer voice の Type B も使用される。(30) は単数の行為者 (一人称単数) の複数回の動作を表し (上記の (3)a)、(31) は複数の行為者 (toumata, 「人々」) の銘々の動作を表している (上記の (3)e)。

- (30) *ana²=ku poke-poke-an=ku*
 child=LK.1sg RED-call-GV=LK.1sg
 'My child has been repeatedly called by me'
- (31) *oto ene ni-sake-sake-an nu-toumata*
 car that PST-RED-ride-GV LK-people
 'That car was where people got on'

7. 結論

本論では Bantik 語の partial reduplication が、Pluractional Verb としての用法を持つことを示した。Bantik 語には Type A と Type B の reduplication の形態が存在する。Type A は base の最初の子音が繰り返され、その後母音の /a/ が続き、base が続く。Type B は base の最初の音節と二番目の音節の onset の子音と nucleus の母音が繰り返され、base が

続く。これらの形態が動詞に適用された場合は、接頭辞が付加された場合も接頭辞は繰り返されず、動詞の base が繰り返され、Pluractional Verb と呼びうる動詞の用法を持つ。Bantik 語の Pluractional Verb は大きく分けて (I)「動作の複数回性」と (II)「主語の複数性」を表す。

Type A と Type B は共に (I) の「動作の複数回性」を表すことは共通しているが、(II) の「主語の複数性」を表すことができるのは Type A のみである。

Type A が (I) の「動作の複数回性」を表す場合、主語が単数であれば基本的に「職業として行う習慣的な動作」を表す。この場合、非過去形しか用いられず、動作の対象となる事物は明示されない (つまり Pluractional Verb が目的語をとらない)。Type A の過去形が用いられるのは (II) の「主語の複数性」を表す場合のみである。また、Type A は Actor Voice でしか用いられない。

Type B の Pluractional Verb は (I) の「動作の複数回性」を表す。主語は単数でも複数でもかまわないが、どちらの場合でも動作が複数回行われていないと用いることができない。この Type B の Pluractional Verb も基本的に atelic な動作を表し、非過去形が用いられる。しかし、動作の対象が特定であったり、動作が繰り返された回数が限定されていたり、期間が限定されている場合は telic であると考えられ、過去における動作を示すときは過去形を使用することができる。Type B は職業を表すことはない。また、Actor Voice だけでなく、Undergoer Voice の動詞も Type B の形態をとることができる。

以上のように、Type A と Type B の reduplication は「動作の複数回性」を表す点で似ているが、詳細に観察すると異なる点があり、また「主語の複数性」は Type A によるのみしか表されないことが示された。

省略記号

1sg	first person singular
1plEXC	first person plural exclusive
1plINC	first person plural inclusive
2sg	second person singular
2pl	second person plural
3sg	third person singular
3pl	third person plural
-AN	suffix <i>-an</i> which has a function of nominalization
AV.NPST-	prefix <i>ma-</i> , <i>maN-</i> or infix <i>-um-</i> that is attached to verb base, indicating non-past tense and Actor Voice
AV.PST-	prefix <i>na-</i> , <i>naN-</i> or <i>-im-</i> that is attached to verb base, indicating past tense and Actor Voice
CONT	enclitic= <i>te</i> that indicates continuative aspect
COMP	enclitic= <i>ken</i> that indicates completive aspect
DP	discourse particle
-GV	suffix <i>-an</i> which is attached to verb bases, which indicates goal voice

I-	nominative case marker attached to subject nominals
INT	interjection
LK-	noun marker <i>ni-/nu-</i> that denotes genitive or actor in undergoer voice sentences, or linker that connects two NPs
PLAC-	partial reduplication that forms a pluractional verb
POT-	potentive prefix <i>ka-</i> which attaches to verb bases
PRO	pronoun <i>tou</i> that forms an NP with a noun, and that functions as an antecedent
PST-	prefix <i>ni-</i> which indicates the past tense that attached to undergoer voice verbs
REL	relativiser <i>nu</i>

参考文献

- Bawole, George. 1993. *Sistem fokus dalam bahasa Bantik*. Dissertation submitted to Universitas Indonesia.
- Gimba, Alhaji Maina. 2000. *Bole Verb Morphology*. California: University of California at Los Angeles.
- Newman, Paul. 1980. *The Classification of Chadic within Afroasiatic*. Leiden: Universitaire Pers.
- Newman, Paul. 1990. *Nominal and verbal plurality in Chadic*. Dordrecht: Foris.
- Noorduyn, J. 1991. *A critical Survey of Studies on the Languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.
- Sneddon, James N. 1984. *Proto-Sangiric and the Sangiric languages*. [Pacific Linguistics Series B, No. 91]. Canberra: The Australian National University.
- 内海, 敦子. 2005. 「バンティック語の構造と接辞の意味・機能」. 東京大学博士論文.
- 内海, 敦子. 2008. 「消滅に瀕した Bantik 語の姿—多言語状態と言語変化—」. 言語研究 134 号. pp 57-84.
- 内海, 敦子. 2010. 「インドネシアにおける地域語・民族語の使用実態—Bantik 語の事例を中心に—」. 明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科 第 18 号. pp 205-234.
- Utsumi, Atsuko. 2012a. Language Use and Attitudes to Language in Multilingual North Sulawesi: A Sociolinguistic Survey in the Bantik-Speaking Area', in *Words in Motion: Language and Discourse in Post-New Order Indonesia*. Foulcher, Keith; M. Moriyama & M. Budiman eds. pp 127-152.
- Utsumi, Atsuko. 2012b. 'Reduplication in the Bantik Language' *Asian and African Language and Linguistics*. Vol. 6 pp 5-26.

注

- 1) *e?e* 'that, distal' や、*hi?aj* 'lift' が声門閉鎖音が base 末以外に現れる例である。これらの他には見つからない。

- 2) Reduplication が表すのは、動詞に関しては「動詞の表す動作を行う主体が複数」、「反復アスペクト (iterative aspect)」、「習慣アスペクト (habitual aspect)」などであり、名詞に関しては「複数」、形容詞に関しては「形容する名詞が複数」などを表す。派生接辞としてもふるまい、名詞から形容詞を派生したり、動詞から形容詞を派生することがある。
- 3) 命令形においては voice-indicating affix が全く付加しない例も多い。また、undergoer voice のうち、Conveyance Voice の非過去形は zero affix が付加するとも言えるが、表層的には何も affix が付加していないように見える。
- 4) 以下において /N/ で表したものは、base の最初の子音の鼻音化である。base の最初の子音が同じ調音位置の鼻音で置き換えられるか、base の前に最初の子音と同じ調音位置の鼻音が挿入されるか、二つの場合がある。
- 5) THEME という意味役割は、主に形容詞と状態動詞の主語になる名詞句について用いる。

Pluractional Verbs: Verbs that denote plural subjects and iterative Aspect

Atsuko UTSUMI (Meisei University)

Abstract

This presentation intends to describe and analyze 'pluractional verbs' in the Bantik Language. Bantik is spoken in North Sulawesi, Indonesia. It belongs to Philippine language group within West Malayo-Polynesian language group, Austronesian. As is often the case with Philippine languages, Bantik has a rich morphology, and many kinds of derivational verbs. Reduplication also plays an important role in the derivation of Bantik. Two types of Bantik reduplicated verb show phenomena similar to Chadic verbs which are referred to as 'pluractional verbs'. This term was given the first designation by Newman 1980 that describes Chadic languages. Pluractional verbs in Chadic languages are often reduplicated, so are Bantik pluractional verbs. The former expresses 'plurality of subject', 'plurality of object', 'repeated action', and so on. The latter mainly expresses either 'repeated action' or 'plurality of subject'. This paper reveals usages and meanings of Pluractional Verbs in the Bantik language by giving examples and analyzing them.

In short, there are Type A and Type B Pluractional Verbs in Bantik. Type A verbs reduplicate the first consonant of the base, followed by the vowel /a/, which is followed by the base. Type B verbs reduplicate the first syllable and the onset and the nucleus of the second syllable, followed by the base. Type A verbs indicate both 'repeated action' and 'plurality of subject' whereas Type B verbs indicate only 'repeated action'. The two types also differ in several more points, especially in aspect and grammatical voice.

